スポーツ指導者の選手に対する社会的勢力とストロークの関係について

Coaches' social power and stroke to players of the team

森　　恭
Yasushi MORI

人が人に影響を与えるという社会的影響過程において，影響の前提となる社会的勢力に関しては，French & Raven（1959）以来多くの研究がなされてきている（斉藤，1987，大坊ら，1990）。

なかでも教師やスポーツコーチの社会的勢力の基盤に関して行われたいくつかの研究において，1）影響者－被影響者の関係の特質によって社会的勢力の基盤が異なること。つまり，教師の社会的勢力とコーチの社会的勢力は類似しているものの，同じ基盤に基づいているわけではないこと（田崎，1976，浜名ら，1983，平川，1987，森ら，1990a，1990b）。2）被影響者の発達段階によって社会的勢力の基盤が異なること（田崎，1979，平川，1987）。3）しかし，関係の特質や発達段階の違いにおいて見られる基盤の違いは，おおまかに見ればFrench & Raven（1959）の5つの基盤あるいは，これに情報勢力を加えたRaven（1965）の6つの基盤のいずれかに分類されるとも考えられること（今井，1986），などが見いだされている。

また，社会的勢力は被影響者の認知に基づくものであると考えられている。このため，影響者のどのような行動が，被影響者からみた影響者の社会的勢力基盤の認知につながるかについて，田崎（1981）伊藤ら（1992）などの研究がある。スポーツコーチのリーダーシップ行動との関連を検討した伊藤ら（1992）においては，「練習と指示」「民主的行動」「専制的行動」「社会的支援」「正のフィードバック」というスポーツコーチの5つのリーダーシップ行動とコーチに関する社会的勢力認知との関係について，運動部に所属する中学生，高校生を対象として検討がなされた。そして，コーチの「練習と指示」に関連する行動が，ポジティブな社会的勢力認知と関連し，特にそのコーチの指導を受けることで選手自身の技能を高めることができるであろうという期待である「利益勢力」の認知につながることが見いだされている。

しかし，リーダーシップ行動はあくまでも集団のリーダーとしての行動を意味するものであり，本来影響者－被影響者の二者関係の中で考えられてきた社会的勢力の概念をそのままあてはめることには，いくらかのためらいを感じる。

また，影響者－被影響者の関係性についても，単に上司－部下，教師－児童・生徒，コーチ－選手という関係そのものの特質のみならず，個人対個人という二者関係の態様を考慮することも重要であることが考えられる。

以上をふまえて，本研究では1）スポーツコーチと選手の関係の態様によって，コーチに対する社会的勢力認知が異なったものとなるのか。2）これらが選手が抱くコーチからの影響感や練習における意欲などにどのように関連するかについて検討することを目的とする。

本研究においては，影響者－被影響者の関係性については，交流分析理論の概念であるストロークから評

2006．6.30　受理

価するものとする。ストロークとは存在の承認，存在価値の確認のために二者間でかわされるものを意味する（M. ジェイムス & D. ジョングウォード，1976，I. スチュアート & V. ジョインズ，1991）。そして，人は他者から承認を受けることを切望しており，ストロークが欠乏することによる身体的・精神的な問題について示唆されている（I. スチュアート & V. ジョインズ，1991）。本研究においては，コーチからのストロークを，これに関する選手の認知という形で測定するものとする。

方　法

調査対象　S 県内の高校運動部に所属する運動部員922名（男子602名，女子320名）。尚，対象となった運動部は陸上競技，ハンドボール，バレーボール，バドミントン，剣道，水泳，水球，サッカーの 8 種目であり，全てのチームにおいて指導者が日常的に指導にあたっていることと，全国レベルのチームを含んだ比較的ハイレベルな選手・チームであったことを付記しておく。

調査方法　平成17年 8 ～12月にかけて，各運動部の指導者に調査用紙を配布し，実施を依頼した。尚，回答済みの用紙を回収する際には，指導者には回答内容を確認することなく封筒に入れるよう求めた。

コーチの社会的勢力の測定　伊藤・森（1987），森ら（1990a，1990b），伊藤ら（1992）によって使用されたコーチの勢力基盤測定質問紙をベースに，森（2006）によって修正を加えられた質問紙にいくつかの項目を追加したものを用いた。森（2006）における主な修正点は 2 点であった。1）質問文を「あなたの運動

表 1　社会的勢力基盤質問紙の質問内容

項目No.		下位尺度
1	監督の指示に従うと自分のためになる	専門性
2	自分は監督が好き	親近信頼
3	監督からの罰がこわい	罰
4	監督の言うことを聞くのは当然である	正当性
5	監督は自分より技術が優れている人	専門性
6	監督のようになりたい	専門性
7	監督はこの競技をよく知っている	専門性
8	監督の言うことは守らなければならないと思う	正当性
9	監督はよい成績や記録を持っている	専門性
10	自分は監督を信頼している	親近信頼
11	自分は選手だから監督に従うべきである	正当性
12	監督はよい選手を育てたことがある	専門性
13	監督はやさしい人	親近信頼
14	監督はむりやり指示に従わせようとする	罰
15	監督の指示は的確である	専門性
16	監督は技術的に尊敬できる人	専門性
17	監督はよいお手本になる	専門性
18	監督はおもしろい人	親近信頼
19	監督はこわい人	罰
20	監督の指示に従う方がうまくいく	専門性
21	監督は自分（私）のことをよく知っている人	親近信頼
22	監督の指示にはしかたがないから従うようにしている	罰
23	監督は熱意を持って接してくれる	指導意欲
24	監督の言うことは正しいと思う	正当性
25	監督を人間的に尊敬している	親近信頼
26	監督に従うのはあたりまえだと思う	正当性
27	監督はよい指導者である	専門性
28	監督として有名な人	専門性
29	自分は監督に信頼されている	親近信頼
30	監督はいろいろとやかましい	罰
31	監督は部員のことを本当に考えてくれる	親近信頼
32	監督は一緒に練習してくれる	指導意欲
33	監督は真剣に指導してくれる	指導意欲
34	監督には自分の悪いところを直してもらえる	指導意欲
35	監督には意欲的に指導してもらえる	指導意欲

部（チーム）の指導者はどんな人ですか」に変更。2）因子分析により，「専門勢力」「親近信頼勢力」「正当勢力」「指導意欲勢力」「罰勢力」の5つの下位尺度から構成されること。

質問紙の内容は表1に示す通りである。本研究の予備調査として行われた森（2006）の調査対象は，本研究の調査対象と同様の高校生運動部員であった。

指導者からのストロークの測定　予備調査（平成17年5～6月，高校運動部員を対象）を経て，5つの下位尺度からなる質問紙を作成し用いた，1）ポジティブストローク：存在や活動の承認を示す前向きな働きかけ。2）ストロークの少なさと値引き：働きかけや承認が少ないこと。3）アドバイス。4）喜びの表出。5）叱責。予備調査では因子分析に基づいて下位尺度を構成したが，本研究において，いくつか項目を追加したものである（表2）。

表2　ストロークの質問内容

項目No.		下位尺度
36	監督はうまくできたときに一緒によろこんでくれる	喜び表出
37	監督は私のことを目にかけていてくれる	PS
38	監督は自分のプレーを認めてくれている	PS
39	監督は私が失敗をしたときにプレーの内容ではなく私自身を叱る	叱責
40	監督は私が失敗をしたときにうまくいくためのアドバイスをしてくれる	アドバイス
41	監督はうまくできたときにプレーを誉めてくれる	喜び表出
42	監督は私のプレーにあまり関心がないようである	少・値引
43	私は監督に必要とされていないと感じる	少・値引
44	監督は私がうまくできたときに、相手が下手だったと言う	少・値引
45	監督はうまくできたときに私自身を誉めてくれる	喜び表出
46	監督は私が失敗をしたときに的確な指示をしてくれる	アドバイス
47	監督は私が失敗をしたときに私自身ではなくプレーの内容を叱る	叱責
48	監督は私のことが嫌いなようだ	少・値引
49	監督は私の頑張りを認めてくれる	PS
50	監督に直接話しかけられることは少ない	少・値引
51	監督は私が失敗をしたときにどこが悪かったかを指摘してくれる	アドバイス
52	監督は私を無視する	少・値引
53	監督は私がうまくできたときに、たまたまうまく行ったと言う	少・値引
54	監督と私は個人的に話をすることがある	PS
55	監督は私を認めている	PS
56	監督は私のプレーが嫌いなようだ	少・値引
57	監督は私が失敗をしたときに頭ごなしに私を叱る	叱責
58	監督はうまくできたときにみんなの前で誉めてくれる	喜び表出

一般的にストロークは相手の存在を認めるという意味から，マイナスのストロークであっても，ストロークがない＝存在を認めないよりはまだ良いとされている（I. スチュアート & V. ジョインズ，1991）。本研究では，予備調査によってマイナスのストロークである値引きストロークとストロークの少なさは相関が高く，同じ因子への負荷の高い項目群としてまとまったため，一つの尺度として分析を進めた。また，値引きストロークとは，選手がよいパフォーマンスを挙げたときなどに，そのことの価値を低め，評価を低めるような働きかけをすることを意味するものである。

運動部活動の諸側面の状況の測定　個々の選手が現在の運動部活動にどのように臨んでいるかを測定するものである。被影響感と従属感は指導者との関係についての認知であり，部への満足度と充実感は運動部活動に対する態度の現れ，日常生活のコントロールと練習意欲は長期的な意欲の現れと考えることができる。それぞれの尺度の項目内容は表3に示す通りである。

各尺度への回答方法　社会的勢力，ストローク，活動状況ともに，各項目文が自身の考えや行動にあてはまる程度について，よくあてはまる＝6，あてはまる＝5，どちらかと言えばあてはまる＝4，どちらかと言えばあてはまらない＝3，あてはまらない＝2，全くあてはまらない＝1として，マークシートへの回答を求めた。従って，各項目の得点可能範囲は1～6点，得点可能範囲の中央値は3.5であった。尚，欠損値については，全て4点へのマークとして扱った。

表3　活動状況についての質問項目

項目No.		下位尺度
59	私のスポーツに対する考え方は，監督からの影響が大きい	被影響感
60	今の運動部はいい部だと思う	部満足度
61	このごろはいらいらすることすることが少ない	充実感
62	監督が練習の場にいるいないにかかわらず，監督の指示は守るようにしている	従属度
63	バランスのとれた食事を心掛けている	生活制御
64	私の練習に対する考え方は，監督からの影響が大きい	被影響感
65	私は監督の指示には従う	従属度
66	私は今の運動部の活動では物足りない	部満足度（反転）
67	私の毎日の生活は充実していると思う	充実感
68	強い選手になるためにもっと練習したい	練習意欲
69	私の技術がいまあるのは，監督のおかげであると思う	被影響感
70	私は運動部の活動に満足している	部満足度
71	監督が練習の場にいなければ，監督の指示はあまり守らない	従属度（反転）
72	今の運動部の練習は自分にはきつい	練習意欲（反転）
73	規則正しい生活を心掛けている	生活制御
74	自分自身が進歩していることを感じる	充実感
75	健康の管理に気をつけている	生活制御
76	自分は元気である	充実感
77	できれば練習で手を抜きたい	練習意欲（反転）
78	今の運動部の練習はやりがいがある	部満足度

結　　果

有効回答者数と種目の内訳　全78項目に対して欠損値が５つ以上の回答，あきらかに同じ点数への回答が続くもの，項目の内容にかかわらず一定の規則に従ってマークされた回答などの場合には，その回答者の全回答を無効なものとし，分析の対象から除外した。種目ごとの調査対象数ならびに有効回答数を示したものが表４である。有効回答率は全体で98％であった。質問紙調査の有効回答率としては極めて高い数値であり，このことから本研究に協力をいただいた各運動部・チームの日常的な活動の充実ぶりをすでに伺い知ることができる。

各尺度の信頼性および全体的な回答傾向　各尺度への回答の概要を示したものが表５である。尺度の内的整合性を示すアルファ係数は，活動状況における充実感と練習意欲でやや低いものの項目の内容からも十分に信頼できるものであると考えられる。また，その他の尺度に関しても0.7以上の十分に高い値を示しており，尺度は信頼できるものであると考えられる。

有効回答全体の回答傾向を示したものが図１である。１項目あたりの平均得点が５を上回る，または２を下回る尺度は見られなかった。そもそも本研究における調査対象が，ある程度きちんとした指導がなされている運動部・チームに限定されるという現状から考えてみれば，いくつかの尺度で１項目あたりの平均得点が4.5を超えたことも十分に納得のいくことである。以上から，本研究においては，全ての有効回答が揃った回答者（有効回答者）の全尺度得点に関して分析を進めることとした。

ストローク認知について　ストロークの５下位尺度への回答から有効回答者をタイプ分けするためにクラスター分析を行った。クラスター数を２から５までの間で変化させてそれぞれの結果を比較したところ，

① ポジティブ型：ポジティブなストロークが高く見られ，ネガティブなストロークが低い。

② ネガティブ型：ポジティブ型と逆の傾向

③ 一般型：ポジティブ型とネガティブ型の中間

という３クラスターに大きく分かれることが考えられた。またクラスター数を増やしていくと，まず一般型がいくつかに分かれ，次にポジティブ型が分割されていくものの，３クラスターに大きく分類される様相は変わらないため，本研究では３クラスターを採用することとした（図２）。尚，各クラスター間のストロー

表4　調査対象，有効回答の詳細

種　目	ランク	性別	配布数	有効回答数	チーム数
陸上競技	A	男	13	11	1
		女	17	17	1
	B	男	59	57	3
		女	10	10	1
	C	男	9	8	1
		女	35	33	2
	小計		143	136	9
ハンドボール	A	男	15	15	1
		女	12	12	1
	B	男	37	37	2
		女	23	23	2
	C	男	24	22	1
		女	13	13	1
	小計		124	122	8
サッカー	A	男	52	52	2
	B	男	74	74	3
	C	男	44	44	2
	小計		170	170	7
バレーボール	A	男	13	13	1
		女	12	12	1
	B	男	37	37	2
		女	26	26	2
	C	男	5	5	1
		女	20	19	1
	小計		113	112	8
バドミントン	B	男	18	17	2
		女	31	29	2
	C	男	7	7	1
		女	11	11	1
	小計		67	64	6
剣道	A	男	28	28	1
		女	6	6	1
	B	男	19	19	1
		女	21	21	1
	C	男	11	11	1
		女	7	7	1
	小計		92	92	6
水泳	A	男	30	28	1
		女	20	20	1
	B	男	83	81	3
		女	26	26	2
	C	男	0	0	0
		女	30	30	2
	小計		189	185	9
水球	A	男	24	23	1
小計	A	男	175	170	8
		女	67	67	5
	B	男	327	322	16
		女	137	135	10
	C	男	100	97	7
		女	116	113	8
	男		602	589	31
	女		320	315	23
総計			922	904	54

※　Aランク：全国大会・地域大会出場レベル，Bランク：県大会上位レベル，Cランク：県大会出場レベル

表 5　調査の内容と全体の得点概要

領域	下位尺度名	略称	項目数	ALPHA	得点範囲	平均	標準偏差	最小値	最大値	項目あたり平均
社会的勢力	専門性	P1	12	0.91	12～72	57.76	10.14	21	72	4.81
	親近性と信頼	P2	8	0.88	8～48	29.36	6.52	7	42	3.67
	正当性	P3	5	0.87	5～30	21.67	3.54	8	30	4.33
	指導意欲	P4	5	0.82	5～30	22.89	4.88	5	30	4.58
	罰	P5	5	0.71	5～30	15.08	4.85	5	30	3.02
ストローク	ポジティブ	S1	5	0.82	5～30	18.22	4.59	5	30	3.64
	少ないか値引き	S2	8	0.83	8～48	20.18	6.50	8	43	2.52
	アドバイス	S3	3	0.87	3～18	13.75	3.04	3	18	4.58
	喜びの表出	S4	4	0.82	4～24	11.93	3.16	3	18	2.98
	叱責	S5	3	0.89	3～18	9.17	2.24	3	16	3.06
活動状況	被影響感	INF	3	0.8	3～18	11.34	3.52	3	18	3.78
	従属感	CMP	3	0.72	3～18	13.81	2.58	3	18	4.60
	部への満足度	STF	4	0.74	4～24	19.23	3.73	4	24	4.81
	充実感	VGR	4	0.68	4～24	16.88	3.77	4	24	4.22
	生活コントロール	CTL	3	0.79	3～18	12.75	3.28	3	18	4.25
	練習意欲	MTV	3	0.52	3～18	10.76	1.97	3	18	3.58

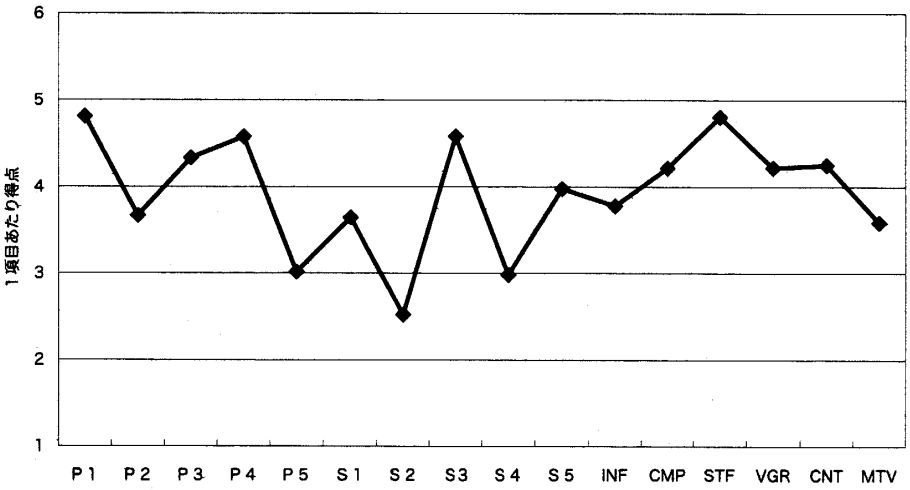

図 1　全体の社会的勢力，ストローク得点，活動状況得点（1 項目あたり）

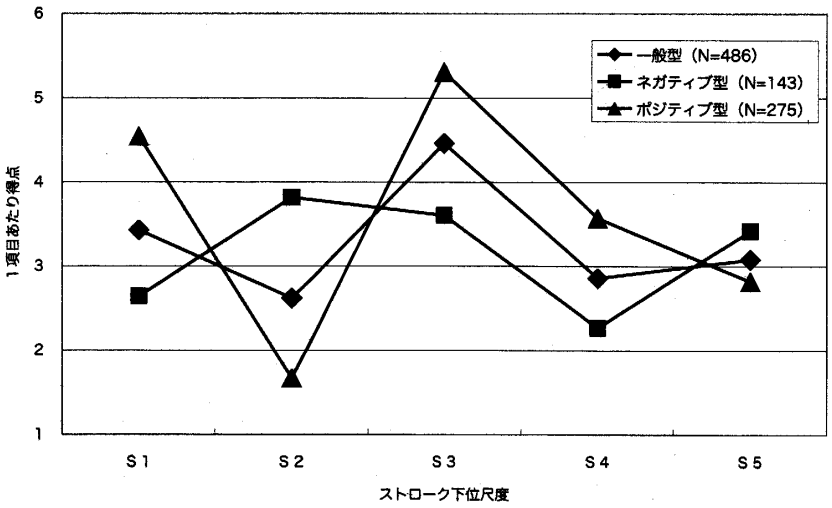

図 2　ストローク尺度得点による 3 クラスター分類

ク下位尺度得点は，１要因分散分析の結果，全てクラスターの主効果が有意であり，全てのペア間の多重比較でも有意な差異が認められた（表６）。ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出については，ポジティブ型＞一般型＞ネガティブ型の順であり，ストロークが少ないか値引き，および叱責に関しては逆にネガティブ型＞一般型＞ポジティブ型の順であった。

表６　ストロークタイプごとのストローク尺度得点（１要因分散分析）

ストロークタイプ	N		ポジティブ	少か値引き	アドバイス	喜びの表出	叱　責
ポジティブ型	275	平均	22.73	13.37	15.93	14.291	8.47
		ＳＤ	3.15	3.11	2.32	2.47	2.19
一　般　型	486	平均	17.15	20.98	13.39	11.43	9.25
		ＳＤ	2.94	2.88	2.39	2.39	1.93
ネガティブ型	143	平均	13.21	30.52	10.81	9.07	10.25
		ＳＤ	4.11	4.66	3.21	3.49	2.79
全　　体	904	平均	18.22	20.18	14.75	11.927	9.17
		ＳＤ	4.59	6.49	3.04	3.16	2.24
Ｆ（2／901）			471.98	1309.86	205.29	206.16	32.59
有意水準			$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$

※　多重比較の結果，全てのペア間の差異が有意

指導者からのストロークのタイプと運動部活動の諸側面の状況得点　運動部活動の諸側面の状況得点を目的変量，指導者からのストロークのタイプを説明変量とした１要因分散分析を行った（表７）。この結果，全ての状況変数に対してストロークタイプの主効果が有意であり，多重比較の結果においても，生活のコントロールにおける一般型とネガティブ型との間以外の全ての比較において有意差が認められた。

表７　ストロークタイプと活動状況（１要因分散分析）

ストロークタイプ	N		被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
		項目数	3	3	4	4	3	3
ポジティブ型	275	平均	13.0	15.1	21.0	18.9	13.5	10.4
		ＳＤ	3.22	2.39	2.89	3.19	3.42	2.03
一　般　型	486	平均	10.9	13.4	18.9	16.4	12.5	10.8
		ＳＤ	9.64	2.33	3.57	3.44	3.19	1.83
ネガティブ型	143	平均	9.6	12.7	17.1	14.6	12.2	11.3
		ＳＤ	3.5	2.77	4.2	4.01	3.08	2.15
全　　体	904	平均	11.3	13.8	19.2	16.9	12.7	10.8
		ＳＤ	3.52	2.58	3.73	3.77	3.28	1.97
Ｆ（2／901）			59.79	59.21	66.17	83.29	10.97	9.78
有意水準			$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$	$p < .01$

※　多重比較の結果，生活のコントロールの一般型とネガティブ型との間以外，全てのペア間の差異が有意

つまり，当初指導者の勢力認知のベースとして考えた指導者からのストロークの認知の違いによって，選手の運動部活動における活動状況に直接的な違いが生じることが示されたと考えられる。このことをふまえ，次に指導者からのストロークのタイプによるグループ毎に勢力認知と活動状況との関連を検討した。

指導者からのストロークタイプごとに行った勢力認知の活動状況への影響　勢力認知の各尺度得点を独立変数とし，運動部活動の諸側面の状況得点を従属変数として，指導者からのストロークタイプ別に重回帰分析を行った（表８）。

表8　ストロークタイプのクラスターごとに行った重回帰分析の結果

全有効回答者（N＝904）

独立変数			被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
ベータ係数	社会的勢力	専門性	.25 **	.06 n.s.	.18 **	-.03 n.s.	-.03 n.s	.20 **
		親近性と信頼	.27 **	.14 **	.21 **	.34 **	.17 **	-.04 n.s
		正当性	.12 **	.36 **	.05 n.s.	.02 n.s.	.03 n.s.	-.14 **
		指導意欲	.14 **	.10 **	.15 **	.13 **	.02 n.s.	.01 n.s
		罰	.04 n.s.	-.21 **	-.03 n.s	-.04 n.s.	.01 n.s.	.28 **
重相関係数			.647	.613	.501	.434	.176	.283
重決定係数			.415	.373	.247	.184	.026	.075
F (5／898)			129.285	108.278	60.290	41.605	5.751	15.617
P			＜.001	＜.001	＜.001	＜.001	＜.001	＜.001

ポジティブ型（N＝275）

			被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
平均			13.0	15.1	21.0	18.9	13.5	10.4
SD			3.22	2.39	2.89	3.19	3.42	2.03
ベータ係数	社会的勢力	専門性	.37 **	.15 *	.14 n.s.	-.01 n.s.	.07 n.s	.13 n.s
		親近性と信頼	.14 †	.14 *	.32 **	.27 **	.12 n.s.	-.09 n.s.
		正当性	.10 n.s.	.37 **	.06 n.s.	.13 n.s.	.08 n.s.	-.07 n.s.
		指導意欲	.11 n.s.	-.01 n.s.	-.04 n.s.	-.14 n.s.	-.13 n.s.	.04 n.s.
		罰	.05 n.s.	-.17 **	.15 *	.08 n.s.	.09 n.s.	.12 n.s.
重相関係数			.596	.584	.416	.293	.188	.178
重決定係数			.343	.329	.157	.069	.017	.014
F (5／269)			29.600	27.832	11.228	5.057	1.972	1.757
P			＜.001	＜.001	＜.001	＜.001	n.s.	n.s.

一般型（N＝486）

			被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
平均			10.9	13.4	18.9	16.4	12.5	10.8
SD			9.64	2.33	3.57	3.44	3.19	1.83
ベータ係数	社会的勢力	専門性	.29 **	.06 n.s.	.19 **	.02 n.s.	-.03 n.s	.18 *
		親近性と信頼	.20 **	.16 **	.13 *	.16 *	.13 *	.04 n.s
		正当性	.13 **	.29 **	.05 n.s.	.03 n.s.	-.06 n.s.	-.15 **
		指導意欲	.12 *	.15 **	.15 **	.09 n.s.	.05 n.s.	.05 n.s
		罰	.06 n.s.	-.13 **	.01 n.s	-.04 n.s.	-.03 n.s.	.29 **
重相関係数			.616	.561	.429	.263	.129	.306
重決定係数			.372	.308	.176	.060	.006	.084
F (5／480)			58.556	44.134	21.647	7.160	1.614	9.935
P			＜.001	＜.001	＜.001	＜.001	n.s.	＜.001

ネガティブ型（N＝143）

			被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
平均			9.6	12.7	17.1	14.6	12.2	11.3
SD			3.50	2.77	4.20	4.01	3.08	2.15
ベータ係数	社会的勢力	専門性	.03 n.s.	.03 n.s.	.37 **	-.03 n.s.	-.09 n.s.	.23 †
		親近性と信頼	.33 **	-.15 **	-.16 n.s.	.34 **	.03 n.s.	.09 n.s
		正当性	.18 *	.63 **	.13 n.s.	.02 n.s.	.19 n.s.	-.27 *
		指導意欲	.12 n.s.	.05 n.s.	.09 n.s.	.13 **	.09 n.s.	-.02 n.s
		罰	.01 n.s.	-.33 **	-.18 *	-.04 n.s.	.01 n.s.	.27 **
重相関係数			.542	.580	.425	.352	.208	.312
重決定係数			.268	.313	.151	.092	.008	.065
F (5／137)			11.406	13.919	6.048	3.874	1.241	2.961
P			＜.001	＜.001	＜.001	＜.005	n.s.	＜.05

※　n.s.：有意差なし，†：P≒0.05　＊：P＜0.05　＊＊：P＜0.01

いくつかの点でストロークタイプによって状況得点に影響を与える勢力が異なっている。まず，被影響感においては，ポジティブ型は専門性と親近性と信頼が大きな影響を与えているのに対して，一般型では罰以外の4つの基盤から影響を受けている。最も特徴的なのはネガティブ型であり，専門性から被影響感にはつながらないようである。また，従属感については，ポジティブ型以外では専門性は関連を持たない。反対に，指導意欲は一般型しか関連を持たない。部満足感においては，ポジティブ型のよりどころは親近性と信頼と罰であるのに対して，他の2クラスターでは指導意欲が関連する。活動の充実感と指導者の指導意欲とが関連するのはネガティブ型のみであった。生活のコントロールに関しては，一般型の親近性と信頼のみが関連を持つようである。最後の練習の意欲に関しては，ポジティブ型では指導者の社会的勢力には規定されないのに対して，一般型とネガティブ型では専門性，正当性（負の負荷），罰（正の負荷）が関連するようである。

また，ほとんどのストロークタイプにおいて，各状況得点への重相関係数，重決定係数が低くなった（表9）。このことからも，指導者のストロークは勢力認知のベースとして機能することが考えられることに加えて，選手の運動部活動への関わりと直接に関連することが予想される。

表9　ストロークによるクラスターと活動状況との関連（重相関係数，重決定係数）

重相関係数	N	被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
全有効回答者	904	.647	.613	.501	.434	.176	.283
ポジティブストローク	275	.596	.584	.416	.293	.188 n.s.	.178 n.s.
一般型	486	.616	.561	.429	.263	.129 n.s.	.306
ネガティブストローク	143	.542	.580	.425	.352	.208 n.s.	.312 *

重決定係数	N	被影響感	従属感	部満足感	充実感	生活コントロール	練習意欲
全有効回答者	904	.415	.373	.247	.184	.026	.075
ポジティブストローク	275	.343	.329	.157	.069	.017 n.s.	.014 n.s.
一般型	486	.372	.308	.176	.060	.006 n.s.	.084
ネガティブストローク	143	.268	.313	.151	.092	.008 n.s.	.065 *

※　n.s.：有意差なし，＊：P＜0.05　その他：P＜0.01

指導者からのストロークのタイプと勢力認知　クラスター分析によって確認された指導者からのストロークタイプ間の勢力認知の差異ならびに1要因分散分析の結果を示したものが表10である。全ての勢力基盤においてストロークタイプの主効果が有意であり，正当性の一般型とネガティブ型との間以外には，全てのペアで有意な差異が認められた。

表10　ストロークタイプと勢力認知（1要因分散分析）

ストロークタイプ	N		専門性	親近と信頼	正当性	指導意欲	罰
ポジティブ型	275	平均	61.7	34.5	22.2	26.0	12.4
		SD	9.21	4.35	3.47	3.54	4.49
一般型	486	平均	57.2	23.4	21.6	22.4	15.6
		SD	9.58	5.26	3.36	4.36	4.14
ネガティブ型	143	平均	51.9	22.8	21.0	18.6	18.5
		SD	10.55	6.46	4.12	5.01	4.96
全体	904	平均	57.8	29.4	21.7	22.9	15.1
		SD	10.14	6.52	3.54	4.88	4.85
F（2／901）			50.14	254.53	5.66	148.03	100.86
有意水準			p＜.01	p＜.01	p＜.01	p＜.01	p＜.01

※　多重比較の結果，正当性の一般型とネガティブ型との間以外，全てのペア間の差異が有意

専門性，親近性と信頼，指導意欲においては，ポジティブ型＞一般型＞ネガティブ型の順であり，罰においては全くこの逆であった。また，正当性については，差異は有意なものではあったが大きいものではなく，むしろほとんど差異がないとも言える。

つまり，指導者からのストロークをポジティブに受け取っている選手ほど，専門性，親近性と信頼，指導意欲という指導者のポジティブな勢力を高く認知し，罰というネガティブな勢力を低く認知すること。さらに，正当性についてはストロークタイプとの関連は低いことが見てとれる。

ストロークと勢力認知の同水準での関連　それぞれの下位尺度間には当然ながら相関が予想される。このことから，ストローク，勢力認知それぞれの下位尺度得点を変数として因子分析（主成分分析，バリマックス回転）を行った。この結果，２因子解が最も単純構造に近いと考えられた（表11）。第１成分に負荷が高い尺度は，専門性，親近性と信頼，正当性，指導意欲，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出であった。また，第２成分に負荷が高い尺度は，罰，ストロークの少なさと値引き，叱責であった。また，正当性は第２成分に対しても比較的高めの負荷を示している。

表11　社会的勢力とストローク全ての尺度得点による因子分析結果

		因子負荷量 成分１	因子負荷量 成分２	共通性
社会的勢力	専門性	.722	.407	.687
	親近性と信頼	.882	.005	.778
	正当性	.435	.618	.571
	指導意欲	.798	.280	.715
	罰	-.484	.590	.582
ストローク	ポジティブ	.761	-.211	.624
	少ないか値引き	-.715	.457	.720
	アドバイス	.807	.009	.651
	喜びの表出	.688	-.003	.473
	叱責	-.173	.651	.454
	２乗和	4.604	1.651	6.255
	寄与率	.460	.165	.626

以上から，専門性，親近性と信頼，指導意欲といったポジティブな社会的勢力基盤の認知は，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出などのポジティブなストロークとの関連が強く，罰というネガティブな勢力基盤の認知はストロークの少なさと値引き，叱責などのネガティブなストロークとの関連が強いといえる。また，正当性については，いずれの成分に対しても高めの負荷を示しており，この結果は森ら（1990a）の結果とも一致する。

勢力認知とストローク認知を込みにした重回帰分析　これまでの結果より，勢力の基盤に関する認知と指導者から受け取るストロークの認知との間には，関連があることがわかった。そこで，ストロークの各尺度得点の影響をコントロールした後の勢力の各得点の影響を検討するため，運動部活動の状況得点を目的変量に，勢力認知とストローク認知の全ての尺度得点を説明変量として重回帰分析を行った（表12）。

表12　社会的勢力とストロークを込みにした重回帰分析の結果

独立変数			被影響感		従属感		部満足感		充実感		生活コントロール		練習意欲	
標準偏回帰係数	社会的勢力	専門性	.25	**	.07	n.s.	.20	**	.06	n.s.	.02	n.s	.14	**
		親近性と信頼	.20	**	.15	**	.12	*	.11	†	.07	n.s.	-.01	n.s.
		正当性	.13	**	.37	**	.07	n.s.	.06	n.s.	.04	n.s.	-.15	**
		指導意欲	.10	*	.09	*	.10	*	.02	n.s.	-.03	n.s.	.02	n.s.
		罰	.02	n.s.	-.19	**	.03	n.s.	-.01	n.s.	-.03	n.s.	.24	**
	ストローク	ポジティブ	.17	**	-.09	*	-.01	n.s.	.19	**	.13	*	.11	*
		少ないか値引き	.06	n.s.	-.17	**	-.18	**	-.14	**	.04	n.s.	.25	**
		アドバイス	.08	*	-.01	n.s.	.03	n.s.	-.01	n.s.	-.03	n.s.	.14	**
		喜びの表出	-.02	n.s.	-.04	n.s.	-.02	n.s.	.06	n.s.	.10	*	-.05	n.s.
		叱責	.03	n.s.	.06	n.s.	-.03	n.s.	.04	n.s.	.07	n.s.	-.03	n.s.
重相関係数			.665		.625		.552		.484		.233		.335	
重決定係数			.423		.384		.264		.226		.044		.102	
F(10/893)			67.152		57.363		33.452		27.298		5.115		11.284	
P			＜.001		＜.001		＜.001		＜.001		＜.001		＜.001	

※　n.s.：有意差なし，†：P≒0.05　＊：P＜0.05　＊＊：P＜0.01

被影響感においては，ポジティブな勢力とストロークが関連するようである。従属感においては，正当性の影響が高く，ネガティブな勢力とストロークは負の影響がある。特に罰は従属感を低める，つまり，反発を増大させる可能性も示唆されよう。満足感においては，ポジティブな勢力が関連し，ネガティブなストロークが負の関連を持つ。充実感はポジティブストロークが多く，ネガティブストロークが少ないことによって高まるようである。生活のコントロールについては，指導者の社会的勢力，指導者からのストロークとはあまり関連がないようである。練習意欲においては，ポジティブなものとネガティブなものがいずれも正の関連を持つようであり，解釈が難しい。

勢力認知とストローク認知による選手のタイプと運動部での活動状況　さらに，勢力認知の尺度得点とストローク認知の尺度得点から，選手をいくつかのクラスターに分類し，クラスター間で1要因分散分析を行った。

今回もクラスター数を2から5まで増減させながら，最も自然な解釈のできる4クラスターを採用した（図3）。各クラスターは以下のような意味である。

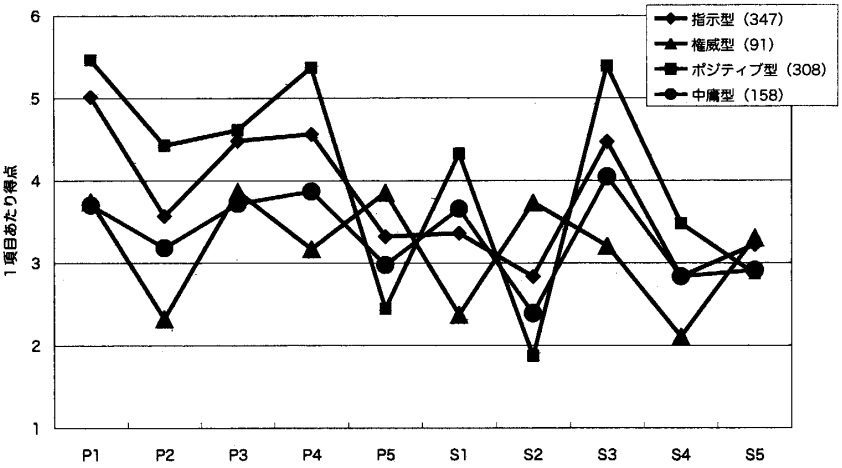

図3　社会的勢力とストローク得点による選手の4クラスター分類

① ポジティブ型：ポジティブな社会的勢力である専門性，親近性と信頼，指導意欲の3勢力と，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出のストロークというポジティブな面が他のクラスターと比較して突出して高く認知されている。また，逆にネガティブなものであると考えられる罰勢力，ストロークの少なさや値引きストロークは突出して低く認知されている。このようなところからこのクラスターをポジティブ型と呼ぶこととする。

② 指示型：全体の尺度得点のばらつきや他のクラスターと比較して，専門性，指導意欲，罰の社会的勢力，ストロークの少なさや値引き，アドバイスのストロークにおいて比較的高い平均が示された。このことはリーダーシップＰＭ論におけるＰ型リーダーシップのように，パフォーマンスを高める働きかけが多く，パファーマンスに関わる社会的勢力の認知が高いことを示している。比較的低い平均得点は，親近性と信頼の勢力，ポジティブストロークで示されており，これらの結果から，このクラスターを指示型と呼ぶこととする。指示型はポジティブ型と比較すると，指導者から選手への対人関係関連の勢力とストロークが低いところが特徴となっている。

③ 中庸型：ほぼ全ての尺度において，他の3クラスターの中での最大平均値と最小平均値との間にこのクラスターの平均値が位置しており，全体的な回答の様相と同様の回答様相を示しており，中庸型と呼ぶこととする。

④ 権威型：このクラスターの回答様相は，他の3クラスターとは異なった様相を示す，他の尺度と比較して，専門性，正当性の勢力が高く認知されている。しかし，これらの認知も他のクラスターの平均と比較すると決して高いものではない。さらに，罰の勢力，ストロークの少なさと値引きストロークについては，他の尺度より高いのみならず，他のクラスターと比較しても高いものとなっている。反対に，

親近性と信頼，指導意欲の勢力，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出などは他のクラスターとの比較，他の尺度との比較のいずれにおいても低いものであった。これらの結果から，このクラスターにおいては，選手と指導者の間の相互作用の少なさ，その少ない相互作用の中で罰やネガティブストロークによるものが多いこと，信頼性が低い中での正当性の認知による服従関係などを伺うことができる。このため，このクラスターを権威型と呼ぶこととする。

それぞれのクラスターに含まれる回答者数にはばらつきがあるが，回答内容（平均）の違いを重要なものと考え，特に回答者数を均一にすることは行わないものとした。またこのこと以上に，クラスター数を増やした際には，各クラスターが分割されてしまうことで，それぞれのクラスターの特徴が曖昧になっていくことから，４クラスターへの分類を採用することとした。

次に各クラスターにおける運動部活動状況得点を従属変数とし，クラスターを独立変数として１要因分散分析を行った（表13）。全ての尺度においてクラスターの主効果が示されたが，多重比較の結果から，練習意欲を除いてポジティブ型が最も高い得点平均を示し，権威型が最も低い得点を示した。また，指示型と中庸型はいずれもポジティブ型と権威型の間に得点平均があり，指示型は指導者からの影響の認知，従属感などの指導者との関係，部への満足感において，中庸型よりも高い得点平均を示した。

表13　クラスターを独立変数とした１要因分散分析の結果

１項目あたり平均得点		被影響感	従属感	部満足度	充実感	生活管理	練習意欲
指示型（347）		3.73	4.51	4.75	4.10	4.18	3.66
権威型（91）		2.84	4.05	3.94	3.45	4.03	3.76
ポジティブ型（308）		4.56	5.13	5.34	4.70	4.45	3.52
中庸型（158）		2.91	4.11	4.40	3.99	4.13	3.47
全体		3.78	4.60	4.81	4.22	4.25	3.59
クラスターの主効果　(F(3/900))			137.08	90.84	91.56	62.31	5.63
有意水準		**	**	**	**	**	**
順位	1	C	C	C	C	C	B
	2	A	A	A	A	A	A
	3	D	D	D	D	D	C
	4	B	B	B	B	B	D
多重比較結果		C	C	C	C	C	BA
		**	**	**	**	**	*
		A	A	A	AD	ADB	CD
		**	**	**	**		
		DB	DB	D	B		
				**			
				B			

※　表中の生活管理は，本文中の生活のコントロールである
※※　n.s.：有意差なし、*：５％水準で有意、**：１％水準で有意

以上のように，専門性，親近性と信頼，指導意欲，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出が高く，罰やネガティブストロークが低いという特徴を持つポジティブ型が，他の型に比べて選手の運動部活動の諸側面において，ポジティブな関連を示した。このことはポジティブ型を特徴づけるこれらの変数が選手の運動部活動の諸側面との間で持つ関連と同様のものであった。また，社会的勢力における５つの下位尺度とストロークにおける５つの下位尺度相互間の関連とも共通する結果となった。

また，ポジティブ型とは対照的に専門性，親近性と信頼，指導意欲，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出の認知が低く，罰，ネガティブストロークの認知が高い権威型は，一貫して選手の運動部活動の諸側面において最もネガティブな結果を示している。このクラスターには904名の回答者のうちの一割にあたる91名が属したが，あきらかにポジティブ型とは異なった運動部活動を経験している様子がうかがえると

いえよう。

考察およびまとめ

以上のように，本研究では選手と指導者の対人関係の様相が，選手の運動部活動のさまざまな側面に影響を及ぼすことが改めて示される結果となった。

当初，本研究者は社会的勢力のベースとしてのみストロークの認知を考えた。このことは，ストローク認知の違いが勢力認知の違いを生み出すこと，ストローク認知の違いが選手の運動部活動の諸側面の状況に勢力認知が与える影響を異なったものとすることから，部分的には確かめられたと考えることができる。

しかし，ストローク認知の違いがまた，直接選手の運動部活動の諸側面の状況に影響を与えることも確かめられた。勢力認知とストローク認知を同じレベルで考え，両変数の合計10の下位尺度得点を因子分析したところ，２因子構造がもっともふさわしいものと考えられ，各尺度はポジティブなものとネガティブなものに分類された。また，同様に10の下位尺度得点を説明変量とし，運動部活動の諸側面の状況得点を目的変量として重回帰分析を行った。この分析からは，他の下位尺度の影響を除かれた勢力認知，ストローク認知それぞれの，目的変量への直接のさまざまな影響を見ることができた。つまり，指導者からのストロークは選手の運動部活動の諸側面の状況に直接の影響を持つことが示されたと考えることができるであろう。

最後に，勢力認知とストローク認知を同じレベルで考え，両変数の合計10の下位尺度得点により選手を４つのクラスターに分類し，４クラスター間の運動部活動の諸側面の状況得点の違いを検討した。４クラスターはそれぞれの回答の様相から，ポジティブ型，指示型，中庸型，権威型と命名された。運動部活動の諸側面の状況に対して，より好ましい影響があると考えられるのはポジティブ型であった。ポジティブ型は専門性，親近性と信頼，指導意欲，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出が高く，罰やネガティブストロークが低いという特徴を持つ。これらの効果として，選手の状況をポジティブなものとしているようであった。また，このような特徴を示すクラスターが存在するということは，これらが互いに関連しあいながら実現されていることも示すものでもある。仮定の上では，専門性が高く，ポジティブストロークやアドバイスの低い指導も考えることができるが，現実の場面では，これらは高めの相関を持って実現されている。

このことは，権威型がポジティブ型やポジティブ型同様のよりゆるやかなプロフィールを示す他のクラスターとは異なって，特異なプロフィールを持つこととも関連する。権威型では，他のクラスターと比較して社会的勢力認知，ストローク認知ともに低い傾向がある。そして，罰の勢力，ストロークの少なさと値引きストロークについては，他の尺度より高いのみならず，他のクラスターと比較しても高いものとなっている。反対に，親近性と信頼，指導意欲の勢力，ポジティブストローク，アドバイス，喜びの表出などは他のクラスターとの比較，他の尺度との比較のいずれにおいても低い。これらが関連した形で現れているのである。そして他のクラスターと比較して，ネガティブ型は一貫して，運動部活動の諸側面の状況に対して，より好ましい影響を与えていない。

以上をふまえ，選手に対して，より好ましい社会的影響を与えるための指導者のあり方としては以下の点が指摘できよう。

まず，ストロークに関しては，より多くのストロークを与えること，特にポジティブなストローク，その具体的な現れとしてのアドバイスや同じことに喜びをいだく，共にあるものとしての喜びの表出を多く示すことが望ましいようである。このことは，選手に対して直接の効果をもたらすのみならず，社会的勢力の認知に対しても影響を与える重要なポイントである。

社会的勢力に関しては，正当性や罰に依拠した影響力の行使よりも，運動部活動において選手の正の期待を高める専門性，心理的な近さを伴った信頼性，指導に際しての指導者自身の意欲という個人勢力（Student，1968）を高める行動パターンを身に付け，あるいは必要な知識・技能を身につけることが重要であると言えよう。

引用・参考文献

大坊郁夫・安藤清志・池田謙一　社会心理学パースペクティブ　3集団から社会へ，誠信書房，1990

French, J.R.P. Jr. and Raven, B., "The basis of social power." In Cartwright, D. (Ed.), Studies in social power. Univerity of Michigan Press: Ann Arbor, Michigan, 1959. pp150-67

浜名外喜男・天根哲治・木山博文「教師の勢力資源とその影響に関する教師と児童の認知」教育心理学研究，31：220-28，1983

平川澄子「体育教師の勢力資源に関する研究ー学習者の発達段階別にみた比較を中心にー」お茶の水女子大学人文学部紀要，41：129-42，1987

今井芳昭「親子関係における社会的勢力の基盤」社会心理学研究，1：35-41，1986

今井芳昭「影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響の認知・影響者に対する満足度との関係」実験社会心理学研究，26：163-73，1987

伊藤豊彦・森　恭「コーチの勢力資源に関する選手の認知ー高校バレーボール部員についてー」島根大学教育学部紀要（教育科学），21：25-30，1987

伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎・森　恭「コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力の認知との関係」スポーツ心理学研究，19-1：18-25，1992

M. ジェイムス・D. ジョングウォード（本明寛・織田正美・深沢直子　訳）自己実現への道　交流分析（TA）の理論と応用，社会思想社，1976

森　恭「スポーツ指導者の社会的勢力質問紙の再検討」新潟大学教育人間科学部紀要　人文・社会科学編，8-2：225-30，2006

森　恭・伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎「コーチの社会的勢力の基盤と機能」体育学研究，34-4：305-16，1990a

森　恭・遠藤俊郎・伊藤豊彦・豊田一成「指導者の社会的勢力ー中学校，高校女子バレーボール選手について」新潟体育学研究，9：1-6，1990b

Raven, B., Interpersonal Relations and Behavior in Groups. Basic Books, 1965

斉藤勇（編）対人社会心理学重要文献集　1社会的勢力と集団組織の心理，誠信書房，1987

Student, K.R., "Supervisory influence and workgroup performance," Journal of Applied Psychology, 52：188-94，1968

I. スチュアート・V. ジョインズ（深沢直子　監訳）TA TODAY　最新・交流分析入門，実務教育出版，1991

田崎敏昭「学級集団における勢力の源泉」佐賀大学教育学部研究論文集，24：105-18，1976

田崎敏昭「児童・生徒による教師の勢力源泉の認知」実験社会心理学研究，18：129-38，1979

田崎敏昭「教師のリーダーシップ行動類型と勢力の源泉」実験社会心理学研究，20：137-45，1981